

# 岡本かの子「蕙の門」「快走」「娘」考

——魅入られた人々(二)——

外 村 彰

一 はじめに

岡本かの子(一八八九—一九三九)の文学をめぐっては、かねて学位請求をした研究書や短歌鑑賞等を著して来た<sup>〔1〕</sup>ため、ここでは、現今までに論じられては来なかった短篇三作を挙げ、それらに形象されている<sup>〔2〕</sup>魅入られた人々<sup>〔3〕</sup>像につき考察をしておきたい。

思うに、かの子文学の魅力はひたむきになって何事かに没入する情熱者が多々登場するところに存するだろう。そうした生き方の諸相には、論者の念願する人生への問いも底流している。——代表的な作品としては、「花は勁し」(『文藝春秋』昭十二・六)の女性前衛華道家や「金魚撥乱」(『中央公論』昭十二・十)の新種の金魚作り<sup>〔4〕</sup>に生涯を賭する男、「老妓抄」(『中央公論』昭十三・十一)のまだ駆け出しの発明家を援助しようと試みる老芸妓などの姿が想起される。それら情熱的な人々の描出の内実を、これまで仏教性の内在も加味しながら解読し続けて来た次第だが、死を一年後に控えたかの子の短篇「蕙の門」(『むらさき』昭十三・一)、「快走」(『令女界』

昭十三・十二)、「娘」(『婦人公論』昭十四・一)も、そうした作風のうち<sup>〔5〕</sup>に点綴され得る佳作と考えられる。

では、どのようなかたちでの「魅入られ」ぶりが、これらの作品群には描かれていたのであろうか。管見ながら「蕙の門」「快走」については、これまで各作をメインとした論考が書かれて来なかった。一方「娘」は近年になって二本の作品論(後掲)が発表されたが、考察をさらに展開すべき余地は残されているようである。次節からは、これら三つの小説を発表順にとり挙げ、各々に込められた魅力のありかを探って行くこととしたい。

## 二 「蕙の門」

「蕙の門」は、語り手「私」の住む家の表門に生え抜がった蕙の説明から始まる。転居することに何故か蕙と縁のある「私」はその姿に愛着を覚え、家人たちと同様「表門を蕙の成長の柵床に閉ぢ与へ」、いつも「小さい潜門」から出入りをする<sup>〔6〕</sup>ことにしていた。

「私」の家では、かねて五十歳過ぎの家事手強い「老婢」のまき

(以下「まき」と記す)が働いている。彼女は正直だが頑固一徹ゆえに親戚縁者と「仲違ひ」し、二度の破婚まで経験して「子供一人な薄倅な身の上」なのであった。しかし、当家の「蕙の芽にどうやら和やかな一面を引き出され」たことで、孤独で依怙地ですらあった性質が、母性の自覚を伴いながら和んでゆく。

ここに「蕙の芽をちよぎ」るいたずらをする「この先の町の葉茶屋の少女ひろ子」が登場して来る。小生意気なひろ子に「まき」は手を焼くのだが、外にあっては元気なひろ子も、両親を早くに亡くし、気兼ねをしながら伯母夫婦と同居していた。「まき」が遠方のひろ子の店まで買物に行くのは、「私」が覗いたように「孤独」が「孤独を牽く」からであった。

やがて二人は、親子然とした親愛の情を通わせてゆく。そうして「まき」は、伯母夫婦がひろ子を養女なり「女給」にしようとしたのを阻み、自ら学費を支払い「赤十字」で学ばせる。その頃には二人も「孤独と孤独」のそれでなく、「深く立入つて身の上を頼り合ふ」真の母娘(おやこ)のような仲となっていた。

私の家の蕙の門が何遍か四季交換の姿を見せつ、ある間に、二人はそれほど深く立入つて身の上を頼り合ふ二人になつてゐた。孤独は孤独と牽き合ふと同時に、孤独と孤独は、最早や孤独と孤独とでなくなつて来た。まきには落着いた母性的の分別が備はつて、姿形さへ優しく整ふし、ひろ子にはまた、しほらしく健気な娘の性根が現はれて来た。

二人は、母親らしい深慮を身に付けた優しい女性、素直で健気な娘へと蟬脱してゆく。お互いの関わりを介して「まき」とひろ子は、当初の姿からいわば良俗的な母娘像に転身していったわけ

であった。

老齡となつた「まき」は「私」の家で隠居然として暮らす。しかし蕙の芽ぶきの季節になると「ひろ子との縁の繋がりが始まりを今もなほ若蕙の勢よき芽立ちに楽しく顧る為め」に、表門の掃除は行う。幼児にわざと蕙の芽を摘ませる心の余裕も持ちながら。——日中戦争が始まり、「看護婦」ひろ子は日本を立つた。「たいしたものだ」と述懐する「まき」。

さて「私」が「余程縁のある」ものと感じていたように、この短篇での蕙、そして門は、登場人物たちを繋ぐ「玉の緒」を生じさせる、人々の心を互いに開かせる「扉」の暗喩であったのではないだろうか。たとえばかの子の短篇「みちのく」(初出題「四郎馬鹿」『雄弁』昭十三・九)には、知的障碍を持つており、のち行方知れずになる四郎少年と、自身に思慕を寄せてくれた彼の帰りを永遠に待つ心持になつて生涯独身を貫くお蘭とが描かれていたが、そこには四郎の一本気な愛情が曳いていった「玉の緒」という、二人の不思議な「縁」を指す表現がみられた。おそらく、そうした奇縁をあるいは象徴もしていたものが、自由に伸長する蕙を生え上げさせて「蕙の門」の縁をとりもつた「私」の屋敷の門であつたと考察されても来るのである。

依怙地で僻みやすい性質をもつて暮らして来た孤独な「まき」も、自然に素直な心で蕙を愛惜するようになってからは、次第に「エゴの殻」を脱して「和やかな」気持で愛情を発露する女性に変わっていった。一方、利発で悪戯好きで「まき」の「敵役」の少女・ひろ子は「みなし児」で、義理の父母の元に住むため「まき」からは「からいぢけ切つて」といふと同情されていた。仲のよくな

かつたはずの両者も「孤独は孤独を牽く」ように互いへの共感がいや増すこととなって行くのであった。

以上述べたごとく「蕙の門」は、蕙を介して深まってゆく人間の、仏教的にいえば「因縁」の不思議さを描こうとした小説だと考察される。寛大な人柄に落ち着いた老齡の「まき」は、ひろ子との「縁の繋がり始まり」を「楽しく顧る」心懐を大切にしながら過ぐす。義理の親子のようになった二人を見守りながら、西行の「命なりけり小夜の中山」の歌を想起する「私」その人もまた（「自然の做すまゝを寛容する嗜癖の家族」と同様に）、「蕙の門」をしつらえて両者の縁を演出しては、彼らの姿に心から、魅入られ、もしていた存在であった。

われわれはかような「縁」の機微を知るにつけ、人間の心のありようというものが、ほんのささいな機縁によってまたとなく深化することを知らされる。「蕙の門」には偶然に加ふるに多少必然の理由はあるのだろうか」と「私」は当初自問をしていたが、閉ざされた門扉から派生しては伸長してゆく玉の緒は、見えない「必然」の牽引力ともなつて、頑なに僻ませられていた誰彼の心の殻を和らげ、人々をして本来あるべき心根の姿にまで昇華させてくれていたわけなのである。

### 三 「快走」

「快走」は壮快な読後感を残す。初出誌『令女界』から察するに、当時の女学生を讀者に想定して書かれた短篇で、その春女学校を卒業した、元陸上選手の道子が主人公となっている。

昭和十三年末といえば、日中戦争の最中で「銃後」の覚悟、忍従を美德とする生活態度が女性に求められていた時代でもある。冒頭から道子が「国策」に沿うべく家族用の「着物の縫い直しや新調」に追われる様子が描写されているのだが、普段から強いられ禁欲的な暮らしを続ける自分に嫌気がさし、ある夜、ひとり多摩川の堤防までやって来る。そこで、誰にも見られていないのを幸いと思ひ切り走り出す。激しい動悸のうちに「ほんたうに潑刺と活きてゐる」実感に身を浸した彼女は、

自分はいま潑刺と生きてはゐるが、違つた世界に生きてゐるといふ感じがした。人類とは離れた、淋しいがしかも嚴肅な世界に生きてゐるといふ感じだつた。

といった風の「一種悲壯な気分」の裡に、人間界の塵埃から飛翔ないし没入するときスポーツの快樂に身を浸しながら、向後は家族に内緒で、毎夜ひとり走り続けてやろうと考えるに至るのであつた。

道子は身にまとつていた着物を堤防で脱いで、その下に着ていた「アンダーシャツにパンツ」（運動着）姿となる。そうして、頭に手ぬぐいを締め、足袋を履いて全力疾走を繰り返すのである。窮屈な生活を送る現実から遊離し、ひととき孤高のランナーになる——そんな「自分独特の生き方を発見」できた彼女だつた。しかし銭湯と称して一時間半も戻らない娘を、親達が不審がるのも無理はない。

道子の兄・陸郎は母親に妹の追跡を依頼されたが、暢気に過ぎて首尾を果たさず当てにならなかつた。とはいへ、さすがに母は道子の素行に眼を光らせ、娘と昼間、銭湯まで入りに行き、その長湯を叱る。やがて道子宛に届いた友人からの手紙（毎晩パンツ姿も凜々

しく月光を浴びて多摩川の堤防の上を疾駆するあなたを考へただけでも胸が躍ります」云々を勝手に読み捨てた両親は、彼女の秘していた事実を知り、ついでには外出した娘を二人して後から追うことにした。ただし、父親は叱るつもりなどなく、娘を追おうとした理由は「俺の分身が」月光のもとでランニングする姿を見てみたい、というばかりのものであった。彼は、

この寒い冬の晩に、人の目のないところでランニングをするなんて、よくよく屈託したからなんだろう。俺だつて毎日遅くまで会社の年末整理に忙殺されてると、何か突飛なことがしたくなるからね。

とも娘に向け同情的な発言をしていたが、何ともこのあたりの言動は、非国策追隨的、かつ所謂家長的厳格さから逸脱した態のそれだとは云えまいか。

そんな夫にあきれながらも、走る娘を見やるため堤防まで同行すると妻は答えるのだが、「真剣な顔」で交わした応答の様が「急に可笑しくなつて」二人は笑いあう。鹿爪らしくふるまおうとする親達も（道子の兄と同様）どうやら暢気な性格で、多分に微笑ましい。

さて「この好夜、一晩休んで肉体が待ち兼ねたやうにうづいてゐた道子が全身に気合を入れての疾駆中、父は「青年のやうに」走つて来て「白い塊が飛ぶ」がごとき娘を遠望する。母も休まず後から追う。そうして久々に全力で走つた開放感から「近來にない喜び」がもたらされ、娘をよそに自分達の「案外まだ若い」脚力に満足し、それを肴に大きな高笑いを交わすのである。——血は争えないというべきか、娘の行動を機に「屈託」から解放される「潑刺」とした運動の喜びを再認識した両親の痛快な笑いが、戦時下の庶民の

いつわらない実情をよく伝えていたというべきか。

いずれにせよ深刻さから遠い短篇「快走」は、四月に国家総動員法が公布された昭和十三年の歳末という、国家ぐるみで堅忍持久の気骨をもつて戦時下を疾駆してゆこうとしていた、規範意識の遵奉が求められた時代の、ある種真面目ぶつた悲壯感を相対化した小説だと考えてもよいであろう。その相対ぶりは、世間へのうしろめたさを従前の屈託とかなぐり棄てた道子が、ひたむきな疾走を通して得た個人的忘我への熱中（仏教のいわゆる「三昧」境に通ずる）に顕現されていたわけである。読者として想定されていた当時の女学生のなかにも、その痛快さに心中で快哉を上げた者がいたことも相応に想起されようか。

堤防を「弾丸」然として「疾走」する道子の忘我的意志は、「御国の為」忍従を求められた当時のステレオタイプのな女性像とは乖離するものであった。国家的意志への随順をある意味、茶化してもあるだろう。真つすぐ自らを全身ごと快樂へと導く、いつときの生の充足。道子の両親の笑いも、強いられた「国民国家」意識という建前に領されようとしていた日常生活への（あるいは無意識下の）不満を忘失のうえ、いつとき蹴散らかした「喜び」に満ちた時間を過ごす「近來にない」娯楽的感覚に助長されていたと思われる。

#### 四 「娘」

「娘」の主人公は家運の傾いた鼈甲屋の一人娘・室子むろこで、彼女は輕漕艇「スカル」の選手でもあった。そうして室子は「肉体の新陳代謝の激しい」健康体の持ち主で、たとえば前夜、自分一人が独身

の参加者だった結婚披露宴の翌朝にはもう空腹になっている。さて冒頭、隅田川畔の寮までよく遊びに来る七歳の義弟・蓑吉(父の「妾」お咲の子で、本家で育てられた)に菓子を買に行かせた室子は、「漕艇用のスポーツ・シヤツ」に着替え「敏捷な所作」でスカルを川へと押し出してゆく。

ところでスカルの漕ぎ手・室子や「快走」の道子、あるいは古式泳法の教師・小初が描かれる「渾沌未分」(『文芸』昭十一・九)と、岡本かの子の小説にはスポーツに打ち込む健康な肉体を持った女性がよく登場する。おそろく昭和十一年のベルリン・オリンピック(六本の「日の丸」メインボール掲揚)での国威発揚的興奮の余燼が残っていた時代背景ゆえと推察される。その四年前のロサンゼルス大会では二位であった前畑秀子の二百m平泳ぎ金メダルが有名だが、ロサンゼルス大会の四百mリレーで五位となった日本水泳女子チームの活躍もあり、女子水泳競技への注目度は高くなっていたようである。戦時期のため結果的には実現しなかったにせよ、「紀元二六〇〇年に当る昭和十五年(一九四〇)、オリンピック東京招致に成功」<sup>5)</sup>していた国家挙げてのスポーツ熱はその頃相当に昂ぶっていたと考えられる。一人乗りで、背中を向けて両手でオールを漕ぎ前進するスカルも、明治十六年から東大予備門の主導により始まった本邦初の隅田川ボートレース以降、当地をいわばメッカとしてこの競技の愛好者を増やしていた模様である。

さて蓑吉に家業を継がせ、室子は「望み手もあらば」嫁入りさせようとの親の意向に反し、彼女は見合いをしても「雄大な娘」「お立派過ぎる」との理由により先方より断られる。「得体の知れぬ屈辱感で憂鬱」になる室子だったが、「スポーツの醍醐味も「水の上の法

悦」も、共に味はせて呉れた」コーチの松浦との「神秘」的な競艇のひとつときは、別乾坤の境地を彼女にもたらしものとなっていた。

精神の集注は、彼女を迫った意識の世界へ追ひ込む。(中略)競漕の昂揚点に達すると、颯風の中心の無風帯とも見らるべきところの意識へ這入る。ひとの漕ぐ艇、わが漕艇と意識の区別は全く消え失せ、ただ一つのものが漕いでゐる。無限の空間にたつた一つの青春がすい〜と漕いでゐる。

こうした描写に対し、近藤華子が「スカルは、室子を俗世の喧騒や煩雑さから解放し、無意識の境地に至らしめるもの」と評したように、自己の精神を没我的な「無風帯」の境界にまで高揚させ得る水上のひとつときは、室子の最も充実した、生そのものを満喫できる時間であったと思われる。その辺りの事情は「渾沌未分」の小初が水中で感得していた「素朴不逞の自由さ」「海豚の欲び」に通ずる忘我への没入とも解せられよう。つまりは身体ごとスポーツに熱中し、我を忘れる経験が、彼女達の生をして最も充溢させ、逆説的だが最も自分らしく生きている実感に満たされることにもなっていたと考えられる。

しかし小初が、地上での生活では経済的不遇から「妾」にさせられる苦境に直面していたように、室子にしても「水の上の法悦」から離れた環境は幻滅の多いものでしかなかった。友人は既婚者ばかりなのに未婚のまままでいて、見合いもうまくゆかず、「水の上でだけ」は好もしいコーチの松浦も「陸の上」では「平凡で勤勉な妻子持ちの社員」でしかないのであった。彼が語る「忙しい日常生活の無味」から室子は、「一般勤労者である男性」達への「気の毒さ」をすら抱いていたのである。

室子は、可愛がつている弟の蓑吉が将来家督を継ぐため、先々の自分の居場所を保証されていない。また蓑吉の母が立場上、実子に遠慮をし、正面からぶつかるのをためらう場面を眺めては理不尽さを抱く。そうして鼈甲屋の家業も時代の推移と共に衰退の度を加えている。このように、地上での世界は不如意なこともばかりであった。近藤論文は、彼女の満たされぬ思いを象徴的に「(空腹感)」と表現していた。さらに同論文も指摘していたように、当時は日中戦争下であり「日本の女性の最大の務めは、結婚をして子供を産み、強い戦士を育て上げることであり」という規範が、女性たちに擦り込まれた時代である。孤独で幻滅も多い、そんな気の滅入る日々を重ねていたろう室子にとって、競艇に没頭できる水上の世界(仏教的に解せば「三昧」の境涯ともなろう)ばかりが自身の救い、または支えとなっていたものと考えられる。

さて「娘」の最終シーンだが、唐突に現れた青年のスカルとの競漕、続く室子の失神という意外な展開となる。隅田川でスカルに乗ったまま、室子は渡船に乗って桜餅を買いに出かけた蓑吉を「男は兎に角、子供だけは持ち度い」と思いながら待つが、瞳の大きな青年の乗るスカルがそこに近づく。その男から感受される「電機性」の「射撃ますやうな雰囲気」は、それまで感じなかったほどの動揺を生じさせ、逃げ去ろうとする室子だったが、青年も「抜群の腕」で漕ぎ付いてくる。その様相は、以下のような感覚的描写で順次叙述されて行く。

その漕ぎ連れ方には愛の力が潜んでゐて、それを少しづついたはりに変へ(中略)その技倆にも女の魂を底から揺り動かす魅力があつた。(中略)恥かしさと嬉しさに、肉体は溶けて行くや

うだつた。(中略)異常な圧迫感が加はる。今まで、自由で、自分で自然であつた自分が手もなく擒にされる(中略)食はれ、没入されてしまふのだ。(中略)この追ひ方は只事では無い。愛の手の差し延べ、結婚の申込みでは無からうか。(中略)青年の艇は大やうな微笑そのもの、静けさで、びたり／＼ついて離れない。

伏線もなく現れた謎の青年は、自身から愛情を浴びせるように発して室子を征服しに来た者でもあろうか。穏やかながら強い精力が漲つてゐる若者の有する魅惑に牽かれ、彼女は漕ぎ続けるうち力尽き、川の中で気を失う。そうして正気に還つたとき「自分を抱き起してゐるのは」(蓑吉でなく)「後の艇にゐた青年」であつた。「娘」は(こ)で終わる。

この、謎めいた青年は「室子の『水の上』の男への憧憬が形になつたもの」で、現実には存在しない男(「河神」)だが、併せて戦時下にあつて讚美される「日本男子」像をも含意する「複層的な存在」だと内田貴子<sup>(8)</sup>は論じていた。おそらくそうした象徴性を体現した幻影でもあろうと思われるが、ただ室子が「イマジネーションの力で男の身体を充分に賞味」しており、「摘」なり「食はれ、没入され」たと本文に記してあつたにしても、青年に敗北したのではなく、彼女の方が「男を食つた」<sup>(9)</sup>とみなす見解には首肯し得ない。

室子にみられるような意識の忘失の場面は、かの子文学にはしばしば描かれる。たとえば「金魚撩乱」の復一は、長年に亘り初恋の女性を超える美を備えた金魚を創出しようとするが、台風で氾濫した池から金魚がすべて流されて絶望し意識を失う。しかし好もしくない種金魚を捨てて来た別の池の自然交配で、まったく意想外の美

しい金魚が生れていた。

ちなみに、意識忘失の間に心機が一転する状況をかの子は「コンパッション<sup>10</sup>」と「回心<sup>11</sup>」といふ心象」と仏教的に解釈していた。そもそもかの子文学からは仏教思想をひそかに織り込ませようとする傾向が見出される。——こうした「回心」は、戯曲「阿難と呪術師の娘」（『散華抄』大雄閣、昭四・五）以降、「迷妄」を浄化する機縁としてしばしばかの子文学には描かれて来たものである。「娘」の場合も、そうした展開のバリエーションの一例だと解するならば、室子は象徴的幻影たる青年の愛のエネルギーによって失神したことで、独身でいたことや水の上でしか男性に魅力を感じないでいた、それまでの自分の「空腹感」を刷新され、意識回復後はより時代相に合う次元の認識を得た「日本女子」的「娘」に変質していたことが示唆されるわけである。

## 五 おわりに

さてかの子の描いた小説群には、全体的にみて情熱者や憧憬者、そうして彼らが関わりあう不思議な縁が、しきりに描出される。ほかにも没我的時間を経た心機の転回、生命量が豊かなヒロイン、脈なす生命に代々受け継がれてゆく意志、また人物が何かの不如意感を他者に被けるといった場面が多々見受けられた。これまで論者はそれら全般に、仏教的モチーフが内在し変奏されていたものと考えて来たが、「蕙の門」「快走」「娘」においてもそうした要素は底流しているようである。

まず「蕙の門」には、蕙の縁を<sup>レ</sup>拈げ深める生命力に感化さ

れ、人間性を高次なそれへと伸長してゆく女性たちが登場していた。次の「快走」からは、全力疾走による鬱屈したストレスの発散とそれを鷹揚に受け容れる家族の姿が見出された。最後の「娘」は漕艇の法悦のひとつのみならず謎の異性の幻惑的魅力に惹きこまれ、没我状態に陥ったあと、おそらく心機が変転したであつたらう若き女性が描かれていた。

「娘」の場合、意識の戻った室子がこの青年に最後「抱き起」させたのが陸上でのことか、あるいはスカルに乗ったままの水の上のことだったかは判然としないが、その青年の魅力に感濁した末に「抱き起」され、既に「擒」とされたかと推察されることから、もはや縁遠かった男も含めた地上的幻滅（空腹感）から解放されていたものと解せる。そもそも室子は「結局のところは男に敵<sup>かな</sup>はない」と考えてもいたため、時代の求めた強い「日本男児」の魅力に抗しきれず取り込まれてしまう女性として形象されたのではなかつたらうか。

「蕙の門」での蕙に象徴される自然の生命を介した因縁は、ひかれあう「母娘」共々の人間性の伸長を惹起してやまなかつた。「快走」の無心の全力疾走の恍惚からは、現状の生活への屈託を発散させたという、いわばカタルシス願望に魅入られた心性が認められた。また同時に理想視されていた男性像に牽かれ、その愛情を受容するべく忘我を経て「回心」（国家的に都合のよい帰趨だが）する「娘」の主人公もまた、「快走」と同じように三昧境をもたらず身体的法悦に魅せられていた。それら諸作から仏教性の内在を見出すことも可能であろう。そうして世に遍在する縁は「蕙の門」ばかりでなく、「快走」の親子や「娘」のスカルに乗った男女をも結ぶものでも

あったのだ。

註

- (1) 拙著『岡本かの子の小説(ひたごころ)の形象』(おうふう、平十七・九)、『岡本かの子 短歌と小説——主我と没我と——』(おうふう、平二十三・三三)、また『新しい短歌鑑賞第一巻 与謝野晶子 岡本かの子』(見洋書房、平十七・五 木股知史と共著)、『撥亂の牡丹 かの子未刊隨筆集』(菁柿堂、平二十二・三編著)等を、参照されたい。
- (2) 単独の作品論ではなかったにせよ、瀬戸内晴美『かの子撥亂』(講談社、昭四十・五)にはかの子が「門にからまつてのびてゆく蕙の生命力がいとしい」といって、蕙をいたわり門を閉ざしっぱなしにするようになった」事実が述べられ、同様の「蕙の門」の場面を「そのままかの子の実生活の描写でもあった」と指摘した箇所がある(第十七章)。また「岡本かの子」(『日本評論』昭十四・七)で川端康成が「健康三題」(『丸の内草話』青年書房、昭十四・五)等に言及しながら「スポーツの動力的に躍動し緊張する一瞬の女体にも、ナルチスムスの恍惚と戦慄とを、岡本さんは感じた」「その姿に美の一つの極限を見た」とした記述は、そのまま「快走」への評言とも解し得るであろう(ちなみに「快走」は平成二十六年度のセンター試験に全文掲載のうえ出題)。
- (3) 「お蘭の玉の緒を、いつあの白痴が牽いて行つたか、自分が婿を貰ひ、世の常の女の常道に入るとすれば、この世の中の何処かの隅であの白痴が潰え崩れて仕舞ふやうな痛ましさを、お蘭

の心がしきりに感ずるのをどうしやうもなかった」とある場面で「玉の緒」が記される。自身の魂を四郎の無垢なそれに感化されたお蘭は、このあと生死の定かでない四郎を生涯待ち続ける人生を送る。「みちのく」の解釈については拙論『みちのく——待つ——をめぐって』掲載の『岡本かの子の小説(ひたごころ)の形象』を参照されたい。

- (4) 当時の読者は疾走する若い女性の描出から、容易に女性初のオリンピッククメダリスト・人見絹江(一九〇七—一九三一。昭三年のアムステルダム大会、八〇〇m走で銀メダル)をイメージしていたと考えられる。

- (5) 水野忠文「スポーツ」(『国文学 解釈と教材の研究』十月臨時増号(一二巻・二号)、昭四十一・十・二十)一二八—一三〇頁。同号は「近代文学の環境百科事典」と題されており、事例も数多く示唆に富む。

- (6) 「『娘』—室子の(空腹感)—」(『岡本かの子 描かれた女たちの実相』翰林書房、平二十六・九・十八)五四頁。

- (7) 前掲「『娘』—室子の(空腹感)—」六一、五五頁。

- (8) 「岡本かの子『娘』論—スカルの競漕に秘められた希求と相克—」(『日本文学誌要』一〇六号〔法政大学国文学会〕、令四・九・二十四)三九、四一頁。

- (9) 前掲「岡本かの子『娘』論—スカルの競漕に秘められた希求と相克—」四二頁。

- (10) 「宗教劇の不可解所とは—岡田八千代の評について—」(『読売新聞』昭九・十二・十八)。解釈の詳細は『岡本かの子の小説(ひたごころ)の形象』を参照されたい。

(11) たとえば岡本かの子はアンケート回答で端的に「なるべく宗教的テクニカルチームを使はず飽まで文芸本来の気魄と魅力をもつて、宗教の精神を内在させた作品を理想とします」(『余の宗教文学観』『仏教文学』昭四・十)と記していた(前掲『岡本かの子の小説(へひた)ころ』の形象』を参照)。

### 追記

本稿は三谷憲正・外村彰・野田直恵・渡邊浩史・金沢芝編『太宰とかの子』(おうふう、平二二五・二)収録の「蕪の門」「快走」等をめぐる旧稿を基に改稿を施したものである。

(とのむら あきら 安田女子大学教授)